

<報告>

韓国・金海国際音楽祭ピアノアカデミーに参加して

～現代の世界情勢（コロナ禍、ウクライナ情勢）を経て今求められる日本のクラシック音楽教育界の指導上観点と未来への改善点～
Participating in the Piano Academy at the Gimhae (South Korea) International Music Festival
 ～Through the Current World Situation (Corona Disaster, Situation in Ukraine), Teaching Perspectives and
 Future Improvements Required for the Classical Music Education in Japan～

奈良 希愛
NARA Kai

2023年2月に招聘教授として参加した、韓国・金海国際音楽祭ピアノアカデミー。韓国の総合大学の大きなキャンパスの中で、大学のフルサポートを受け、コロナによる中断を経て、本年再開された。多くの人が体感したように、コロナ禍からの立ち直りが大変遅かった、我が日本。世界が活動を復活させるスピードを加速させる中で、なかなか立ち直りが期待できないその状況に、心折れそうになったのは我々だけではなく、学生もそうだった。そんな彼らも日本から、この韓国でのピアノアカデミーに参加する気力を持って臨んでくれたことは喜ばしい傾向ではあった。ただ、アカデミーを通しての体験及びレッスン中に感じた、多くの日本人学生に見られる課題を通して、現在におけるクラシック音楽の教育における課題と改善を、指導者及び学生の立場双方からの観点でまとめ、一方国際的なアクティビティの開催における、アジアでよく見られる傾向と問題点にも触れた。

キーワード：ピアノ、コロナ禍、韓国、マスタークラス、ピアノアカデミー

1. 金海国際音楽祭ピアノアカデミーへの指導陣としての参加

2023年2月17日より25日まで、韓国で行われた金海国際音楽祭ピアノアカデミーに、招聘教授として参加する機会に恵まれた。この音楽祭は、韓国・仁済大学校 (Inje University) で2006年より開催されており、今回が16回目（コロナの影響で延期なども含まれる）となる。私自身、過去に数度音楽祭の方に招聘を受けたことはあるが、ピアノアカデミーの方への参加は初めてとなった。今回参加を決めた理由は、コロナ禍を経て未知の世界・課題と向き合わざるを得なくなった全ての分野のように、クラシック音楽界の進むべき道を学ぶ必要性を感じており、音楽仲間はどうにもその道を探し出そうとしているのかをこの機会を通して学びたかったからである。

どの時代にとっても、クラシック音楽を学ぶ上で、世界の中心から日本は地理的に既に「遠いところに」属していることを認識しており、またその現実ゆえの課題にも以前から答えを求めている立場ではあったが、この3年を超えるコロナ禍を経て、私自身の気持ちも、そして世の中の気持ちも諦めるものが強くなってきている気配を、そのまま受け止めるのは己の怠けでもあると感じ、あえて勇気を持ってこの機会を通して、学びの世界に飛び込むことにした。またこのコロナ禍における世界的閉鎖の環境は、世界中の全ての人と同じように我々にとっても大きな問題を与えることとなった。海外への移動が難しくなり、少しコロナの衰退が見えてきたと思ったら、今度はウクライナ情勢という厳しい問題が立ちはだかり、円安なども重なり、学生たちにとって貴重な「海外での勉強」ということが、もはや夢のまた夢のような状況ともなった。そんな中で、隣国韓国まで、現役のドイツの音楽大学の教授たちがレッスンをしにやってくる環境は、日本の学生にとっても一筋の希望の光となるのかもしれない。その可能性を否定しきれなかったので、私が指導している学生たちにも、このアカデミーに関して案内だけはしてみた。結果、国立音楽大学からも（ピアノ科に限らず）7名の学生がこのアカデミーに参加する機会を得た。これはそれぞれの学生を指導してくださる先生方のご理解もあってのことだと、改めて感謝している。

巨大な総合大学の音楽学部のキャンパス内で行われた今回のピアノアカデミーは、練習が24時間大学内で可能

であり、また受講生は様々な先生のレッスンが聴講できる環境、そして韓国の音楽学生のレベルや生活スタイル、音楽の傾向をはじめ、学生コンサート、コンクールなども行われ、かなり密なアカデミーでの時間となったと思う。我々講師陣も、古い友人・恩師の集まりであったので、連絡がこまめに行き交うこととなり、結果かなりアットホームな雰囲気、受講生たちもそういう点では、先生と近い空間をレッスン以外でも感じられ、新しい体験だったのではないかと察する。

2. ピアノアカデミーでレッスンを通訳して感じたこと

私は今回レッスン以外に、日本からの学生がドイツの音大の先生方のレッスンを受講する時に、時間の許す限り通訳を担当した。

以前から（というか私自身の留学時代から）強く感じていることの1つに、韓国人の英語力の高さは、日本の生徒、学生と大きく異なる現実がある。これに関しては、何がどうしてここまでの差を生んでいるのか、教育システムのみならぬ問題があるとは認識しているが、それはあくまでも個人的意見なので割愛したいと思う。ただ、現実的にいえるのは、「コミュニケーション力の不足」が、日本では許される傾向になっていることだ。

いつの頃からかわからないが、日本人は結果が良ければ、という学びの傾向が強いように感じる。果たしてテストシステムの導入の頃からか、ある程度できれば卒業、合格、という傾向が強いのでは日本の教育の中で多く見られる。個人の意見よりは、方向性が正しければいい、という最終確認の意義の強さが感じられる。

ただ、それは創造力を必要とする分野、答えが一つではない分野では通用することなのだろうか？正直に言って、それは間違っていると私は考える。私が現在関わる音楽の分野においても言えることだが、進み方、歩み方、選び方などの「自己責任」が伴う点での理解の深まりが、本当に必要だと思う。

通訳をしていても、日本人学生の語学力は実に乏しく、先生の質問に対して答えられない時間があまりに多く、結果限られたレッスン時間の中で、指導側は理解しているかどうかを、受講生との対話で確認することが厳しいまま、先に話しを進めることを強いられる状況が日本人には多すぎた。常日頃から語学力向上の必要性は私自身授業の中でも伝えているし、きっと学生も体感したと思うのだが、この学びには継続が必要で、特に初期（初級）の段階の丁寧な正しい学びが絶対不可欠だということに関しての価値の重みに、ほとんどの学生が興味を持っていないのが残念であった。言葉がわからなければ、適当に話を飛ばして理解しようとする傾向があるのは、多くの人間の危険な癖の1つだと思う。そして音楽学生は確かに、実技の練習に時間をかける必要がある。例えばピアノ科ならばそれは1日の大半にあたり、その意義も理解できる。

ただ一方で、その地道な歩みを、時に、根底から壊してやり直す、といういわば屈辱的なことに対しても、勇気を持って行くくらいの気持ちというのは、今の学生たちには少ないのかもしれない。それは教育方針が変わっていく中で、一番縁遠くなった体験の一つであろうと思う。我々の時代には、受験志望校を変えた段階で指導を受ける先生を替え、スキルを一からやり直し、そして入学し卒業し、そのまま留学してみると、まさかの23歳前後で今一度全てやり直しが必要な経験も少なくなかった。それはピアノの実技のスキルだけでなく、例えば留学した後に、自分には23歳にもなって全くラテン語の知識がない現実の重みを知らされた時、私はピアノをやめなくなるほどだったので、その重みは理解できないわけではない。

ただその辛い経験があってこそ、自分のこれまでの努力を見直し、時にはぶち壊し、一からやり直そうという勇気を持つことができたのも事実である。その繰り返しが怖がらなくなったことで、自身で道を探し、作ることに必要性を感じられたので、良かったとも考える。そういう環境があまり周りになくなった現代の学生は、そういう点で結果的にいい意味の反省精神がなくなり、いつまでも良い子で、先生の言うことを聞き、ずっと先生の生徒でいようとする傾向が強くなってはいないだろうか？通訳がある段階では、説明を受けるような状況での理解なので部分部分への対応は良いのだが、実際に演奏してみましようとなると、先ほど説明された「アプローチ

法」というのを忘れてしまう学生が多いのも気になった。

日本人の学生は（私も含めてだが）概して恵まれすぎているのかもしれない。大学も当たり前のように選んで、その二段階、三段階先まで意識することなく、まずはとりあえず大学、という意識の学生が強いため、次の卒業後の課題も似たように深く考えず、やりたいことをとだけ望む学生が多いように思う。いつまでも義務教育のようなレールは人生には置かれたいと言うのに。

指導方法にも言えると思う。先生と意見が違うことを怖がる学生が多い。海外の指導者の多くが、考えさせる質問をし、理解するには時間がかかり、会得するためにはさらに多くの時間を必要とするということも理解させるために努めている。言い換えれば、すぐにできることがなくて当たり前だというスタンスで、本当に理解しようとする学生は自然と疑問点が出てくることがあるので、質問をすることも増えてくる。それは全く間違いではなく、むしろ正しい学び方であるのだが、語学の壁がある場合、自身の言葉で考えを説明することもできないし、おそらくその大切さを重んじていないから、語学力などに関して伸ばさなくていい、と思ってしまうのかもしれない。それはとても残念だ。勉強には忍耐も必要で、それは指導する側になると自然と学ぶものなのだが、案外学生時代には気づかないことが多い。すぐにできるような魔法はなかなか存在しないと、わかっている学生は少なくないはずなのに、実際のレッスンの反応には、そこを期待しているような学生が何と多いことか。マスタークラスや夏期講習などのレッスンが多い世の中、指導する側になるとわかるが、所詮1、2回のレッスンでは教えられることには限界しかない。この点でも継続というものの本当の価値の高さが、否が応でもわかる。ただ、あまりに世の中が戦争・病気・経済の点で動きにくい状況になった日本人の立場からすると、その現実を理解しつつ、なす術が少ないという問題点もある。

2023 GIMHAE INTERNATIONAL MUSIC FESTIVAL PIANO ACADEMY
韓国・金海国際音楽祭ピアノアカデミー 2023

2006年に「ロベルト・シューマンの音楽の世界」の開催において、大変な注目と高い評価を得たこの音楽祭は、2008年より毎年開催されています。アジアのみならず世界を越えたい音楽家たちが集まり、国際的に著名な教授たちと近い距離での指導を受ける。音楽祭後のマスタークラスを通じて、学生たちの音楽家としての資質向上、芸術に結びつくための学びを提供しています。

日程 2023年2月17日(金)-2月25日(土)-2月26日(日) 計9日間(8泊)
場所 韓国 金海市 (GIMHAE) 仁済大学校 (Inje University)
宿泊先 JB Hotel Gimhae, ASOME Hotel など
参加費 1,730,000 韓国ウォン (約260万円) ※2023年12月15日(火)までに前払金(約50万円)にて表示 ※韓国に在住の場合は、韓国ウォン150万円(約23万円)の現金、クレジットカード決済、銀行振込も可 ※学生1人あたり韓国ウォン100万円(約15万円)の奨学金(奨励金)も可

出演者
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間

申し込み期間
●申し込み開始 2022年12月15日(火) - 2023年1月15日(日)
●申し込み締切 2023年1月15日(日) 15時
●申し込み先 <https://forms.gle/3w2Awv0b17Y3k237>
●お問い合わせ www.gimhae.or.kr, info@gimhae.or.kr, [+82-10-7928-3858](tel:+82-10-7928-3858)

2023 Gimhae International Music Festival Piano Academy

日程 2023年2月17日(金)-2月25日(土)-2月26日(日) 計9日間(8泊)
場所 韓国 金海市(仁済大学校 Inje University)
宿泊先 JB Hotel Gimhae, ASOME Hotel など
参加費 1,730,000 韓国ウォン (約260万円) ※2023年12月15日(火)までに前払金(約50万円)にて表示 ※韓国に在住の場合は、韓国ウォン150万円(約23万円)の現金、クレジットカード決済、銀行振込も可 ※学生1人あたり韓国ウォン100万円(約15万円)の奨学金(奨励金)も可

出演者
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間
2023年2月17日(金) - 2月25日(土) 計9日間

申し込み期間
●申し込み開始 2022年12月15日(火) - 2023年1月15日(日)
●申し込み締切 2023年1月15日(日) 15時
●申し込み先 <https://forms.gle/3w2Awv0b17Y3k237>
●お問い合わせ www.gimhae.or.kr, info@gimhae.or.kr, [+82-10-7928-3858](tel:+82-10-7928-3858)

2023年金海国際音楽祭ピアノアカデミーのチラシ

3. ピアノアカデミー運営上の課題

運営の点でも、課題は少なくなかった。私の友人である主催大学の教授は、大変アクティブな人で、そのバイタリティたるや人間業ではない次元であることは間違いなかった。ただ、海外の学生を集めたい、と言う割には、そのために必要なエクストラな仕事に気づくのが遅かった印象はある。例えば、アカデミーの案内のホームページに英語のバージョンがなく、日本独特の語学問題から「日本語もあったほうがいい」という意見を取り入れたのもかなり遅かった。また、その日本語サイト、日本語のアカデミー表記の案内文を作ったのも、あまりに時間がかかっている現状から、私が今回全て行った。

また、韓国で韓国語と日本語の音楽専門の通訳が可能な人間を探すのにも苦勞し、結果アカデミー開始1週間前に、私が行うことで繕った。日本からの参加者への対応は、ほぼ全て私が最終的に関与するはめになった。昨今便利なSNS（今回は主にKAKAO TALK）で、随時受講生たちには連絡が来て、翻訳機能でほぼほどに日本語に訳された文章も届いてはいたのだが、その文章はどうも完璧ではないため、最終的に常に私が日本人参加者のために説明し直して、連絡の架け橋の担当をしていたので、正直かなりの仕事量であったことは否めない。もちろん人の助けというものがなくしては、人生進むわけもなく、今回その助ける側に少しでも立てたことは、人としての喜びであり何も難癖つけることではないが、この点でも今後課題は解決されなくてはならない、と体感したことは確かだ。

運営の点の課題は、随時世界情勢、社会状況を鑑みて進められなくてはならない。それはもちろん永遠に通過点であり、改善はあれど終わりはないと考えていいと思う。

4. 学生の意識改革の必要性

一方で、学生の意識改革に関しては、近々に改善が必要だと考える。人の人生のうち、日本では大学生である時間というものには本当に限られていることが多い。そしてその中で、学び方を学ぶということが、芸術の分野で大切であることを気づく機会が少ない。とても大切なことなのに。結果、日本の指導の方法ではその点が意識として欠け、実力がつく学生が少なくなってしまうのではないかという印象を、今回の韓国のマスタークラス参加を通して感じた。

それをどうやって改善していくか、ほぼ永遠の課題にはなるのだが、一つ言えることがある。それは私自身が、演奏も指導も現役でいる必要がある、ということだ。演奏法は座学の学問ではなく、定義をつける学問の方ではなく、体験していくことが大事な分野である。実践することを教えるためには、実践していくことが大切だ、とも強く感じている。それが延いては、我々が今日の前にしている、新しい環境の中での前進に不可欠なことだと学び、時間的な厳しさはあるが、なんとか努力していきたいと考える経験となった。

受動的な立場にしかたない、世界に対する我々の立ち位置ではあるが、一つ、ひとりの人間として望むものは、やはり現在のウクライナ情勢に平和的解決が1日でも早く来ること。また世界へ目を穏やかに向けやすくなり、学ぶ者全てが、諦めることが少なくグローバルな視点を培えることを強く望みつつ、まとめた。